

西教寺の歴史（一）

西教寺は、聖徳太子が仏法の師である半島出身の恵慈、恵聰のために開創された寺で、推古天皇の二十六年（六一八）に大窪山の号をたまり、天智天皇の八年（六六九）に西教寺の号を下賜されたと伝えられている。

寺の歴史記には第十八世の天台座主慈恵大師良源大僧が開創され、その後恵心僧都（比叡山横川の僧・往生要集の原作者）があとをついで、念仏道場としたと記録があります。その年代不明であります。

十世紀の初めで、ご本尊は不動明王と毘沙門天を脇士とした丈六（一丈六尺）の阿弥陀如来でありました。

その後数百年、荒廃を重ねましたが後醍醐天皇のとき、法勝寺を再興した慈威和尚が、勅命によって荒れていてのを再興された。

その因縁で法勝寺末（京都岡崎六勝寺の一ヶ寺）の円戒道場となった。

その後再び荒れはてしてしまったところへ、真盛上人が入山して復興されたのです。恵心僧都は日本の念仏信仰の大先達であり、慈恵大師良源大僧正とともに、念仏に縁の深い祖師で、おそらく西教寺は比叡山横川の滅罪寺として建てられ、坂本の里に最も近い寺であるから比叡山だけでなく、坂本の里人の滅罪寺として、道俗男女が参詣して念仏供養をしてきたのであろう。

しかし、鎌倉時代には衰微して荒廃していた。それを再興したのが慈威和尚で、その関係で法勝寺末の円戒道場となり比叡山四箇戒場の一つに数えられた。

このように西教寺は念仏に、そうして円戒にゆかりが深く、真盛上人の信仰とぴたり合致する寺であります。

真盛上人、比叡山黒谷より下山、西教寺へ入寺されて不断念仏の道場となったのである。

(一) 真盛上人について

真盛の父は小泉左近尉藤能といい、当時伊勢の国司で現在の津市の一志の方面で生をうけ小泉家は紅氏の末裔で上人は紀貫之から数えて十七世紀あるいは二十一世と言われている。

真盛上人は嘉吉三年（一四四三）伊勢出生

寛正元年（一四六〇）十八歳で比叡山登る

寛正二年（一四六一）十九歳で比叡山南上坊慶秀和尚の室に入る

文明一五年（一四八三）四十一歳で比叡山黒谷青竜寺に隠棲、その後四十三歳文明十七年（一四八五）伝教大師廟に参籠、往生要集を徹す。

文明十八年坂本生源寺で往生要集を講義、西教寺へ入寺、西教寺を復興、四十八夜別時念仏、宮中進講、日野富子等円頓戒を授けその間約十年間の布教活動であった。

明応四年（一四九五）伊賀西蓮寺で遷化、御年五十三歳であった。西教寺を総本山とする。四百ヶ寺余りの小宗門で現在天台真盛宗となっている。

上人入寂六十年後にフロイスが手紙の中で約五十年前、阿弥陀の宗派の中に、新たにシンセイというものがおり、絹物を着用せず、厚い紙で作った衣類を着ることにしている。貧しい生活に安んじ、世俗的な華美な生活をしないので、一般にはあまり重んぜられていない。としているところから真盛一流が異色の存在であったことが知られます。



総門

千古の歴史を誇る西教寺も、ご承知のように織田信長の焼き打ちに遭ってしまっただから、現在の建造物はみなそれ以後のものである。そのころ、光秀公は、主君の信長に知遇をえて絶好調の時代で、焼き打ち後の元龜二年（一五七二）九月には、信長より近江滋賀郡を与えられ、早速その年に坂本城の築城に着手し、翌年七月には殆んど完成したようであるから、余程急ピッチで工事を進めたものであろう。

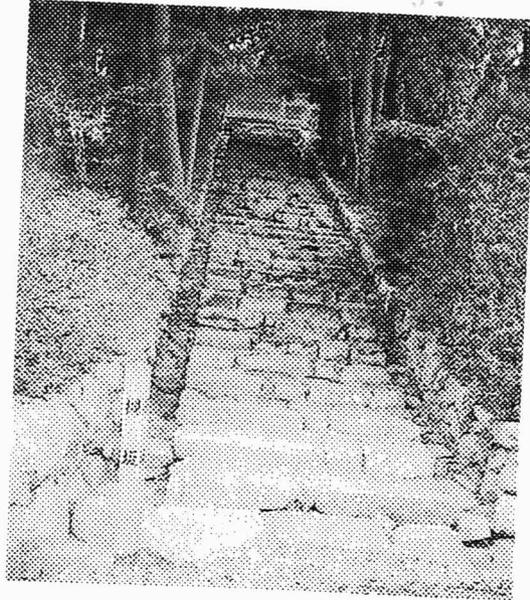
西教寺の総門も、坂本城主としての光秀公が寄進し

たものといわれている。門が高いのは、馬に乗った人が悠々と通れる高さが必要だったためである。総門を入って突き当りまでを「馬場通り」といった。現在は坊が建ち並んでいるが、当時は両側は松並木であった。突き当りから右へ折れて進むと通用門があつて、そこに「馬繋ぎ場」（今でいう駐車場）があつた。だから当時はそこまでは、総門以外には何もなかったようである。諸堂はそれより一段高い上（西）の方にあつたようである。以下続いて案内をしながら、坂本城主としての光秀公の西教寺復興の援助振りをみよう。

元龜二年以前の西教寺



(比叡山絵図・南溪蔵)



本堂へ登る槻坂

「馬繋ぎ場」の手前で左本尊の毘首羯磨作、丈六の
を向くと「槻坂」と呼ばれ
ている石の階段道がある。
全部で四十一段ある。しか
も昼なお薄暗い木立の間
にある。これこそ千古の昔
から残っている唯一の坂道
であろう。かつては、真盛
人や光秀公の足跡も残って
いたであろうと想うと一層
感慨深いものを覚える。

槻坂を登りつめると、焼
打ち直後は勿論、瓦礫の山
であったであろう。ときの
住持七世真光上人初め住僧
等は呆然自失、なすすべを
知らなかったであろう。何
しろ一切の建造物を初め、

阿弥陀如来像、脇土の不動、
多聞天像等も焼失し、戒場
三聖図や、等龍筆真盛上人
画像等も奪われるという惨
状であった。余りのショッ
クに真光上人は翌年急逝
され、後を継いだ八世真
源上人によって復興が進
められたのであった。

(一) 明智光秀と西教律寺記と実成坊由来

真盛上人再興の西教寺は信長によつて灰燼となり、八世真源上人によつて、その復興が行われたが、先ず第一は本堂と庫裡（大本坊）である。「西教律寺記」によると、罹災後二年経つた天正二年に、真源上人は財を募り、本堂仮殿を建立上梁し、本尊として、江州甲賀群浄福寺の阿弥陀如来（現本尊 重文）を請つて奉安したと記してある。

また享保十九年（一七四三）に実成坊実宣の著わした「実成坊由来」には、「明智宗光居士ハ、先祖ヨリ当時ノ外護ナリシガ、軍余此ニ来ツテ灰炉ノ墟ヲ周視シ玉フニ、僧徒モ跡ヲ隠シ、極イ人モ無カリシカハ、朝夕ノ勤行自ラ断絶セル事ヲ憂ヒテ、殘僧ヲ尋ネ出シ、又吾力士卒ニ下知シテ、焼ケ余リシ材木ヲ集メテ、遂ニコノ仮リ仏殿ヲ作ラシム。維時、天正第二ノ年ナリ。」と誌している。

当時、坂本城主だった光秀公が外護者として、又、西教寺を明智一族の菩提寺として信仰が厚いことが判る。

「由来」書

根此寺有テ山上山下ノ堂社僧坊民屋ニ
至ルニテ概キ者トテ累代ノ社領寺産盡ク没
收シテ山門殆ク絶ニ及フ傳言山門長閑開閉
ニ不ニ悉ク元龜カ龍
吾カ寺モ此岳火ニ毀ツテ建物の言フニ及ハス
本尊 本堂者五菅葉吸和向平 初所建者先也今獨有圖
傳説了資本尊天六獨院 不動足カ門カ其脇侍供
虎首獨居 門手獨也 什物佛像經卷池沼總ベテ古産

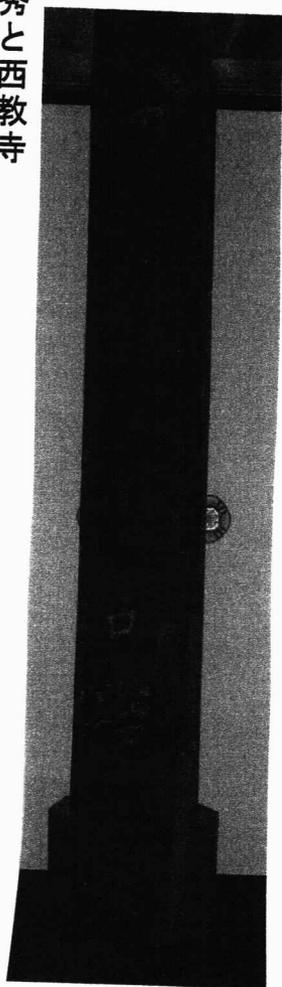
享保 19 年 (1734) に著わさ
頁の変遷を知る 貴重な資料

「実成坊再興

寄附状
 公家所寄寺直狀歌過夫共餘舊記實物寺延願印
 成徳堂了秋開闢以末歴代系嗣有徳行祭事具載
 以智
 日州宗光大居士八先祖ヲ當寺ノ外護ナリ方
 寺有日列手書寄附書同
 狀史筆統等今猶不棄軍軍餘此ニ未テ天塔ノ墟
 フ周視シテモ之傍モ跡ヲ隱シ極ム人モ無リシカ
 ハ教タノ勤行自ヲ断絶セリウヲ憂テ殘信

写 23 「実成坊再興由来」書
 れた記録で西教寺および塔

(二) 明智光秀と西教寺



元龜二年（一五七一）七世真光上人のとき、織田信長の比叡山焼き討ちがあり、西教寺も全山焼失しました。西教寺の復興は檀信徒の協力が大きな力になっているが、特に力をかしてくれたのは明智光秀である。

叡山焼き討ちの直後、比叡山を監視するために坂本湖岸の十津浜に坂本城が構築され、その城主となって来た光秀が西教寺の檀徒となったのです。

焼けたすぐあとに建てられた本坊が、光秀の寄進によったものであることを、昭和三十年の改築のとき屋根裏から発見された「天正年間明智公所用古木」と刻んだ用材と愛用の鞍が出てきました。

第5回

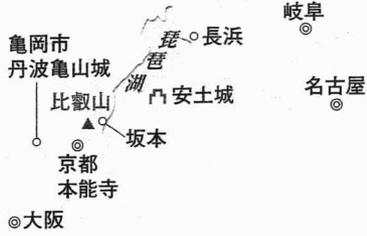
明智光秀の亡魂

『国盗り物語』の後編の主人公は織田信長だが、書き進むにつれ、司馬さんの気持ちは、信長を倒す明智光秀に傾いていく。

「妙なものだ。筆者はこのところ光秀に夢中になりすぎているようである。人情で、ついつい孤剣の光秀に憐憫がかかりすぎたのであろう」と、書いている。

光秀の人生も謎が多い。出身地や生年月日もはっきりしない。16世紀後半の日本史に忽然と登場し、慌ただしく退場することになる。

織田家にいわば途中入社し、信長



大津市から見た比叡山の山並み／安野光雅画

に才能を高く評価され、木下藤吉郎（豊臣秀吉）と競い合うように出世の階段をのぼる。もともと司馬さんは、心優しきインテリとして光秀を描く。司馬さんの光秀は繊細すぎる神経の持ち主で、信長の行動、言動に過敏に反応し、しだいに追いつめられていく。

光秀の「孤剣」の軌跡を訪ねてみる。まずは大津市坂本。光秀が最初に城を築いた土地で、城があったあたりは公園になっている。ぼつりと光秀の像が立っている。

竹下内閣のふるさと創生資金で建てられたそうで、像の下のプレートには光秀の作といわれる歌が添えられていた。

「我ならで 誰かは植ゑむ 一つ松
こころして吹け 滋賀の浦風」

『国盗り物語』に、「唐崎の松」という章がある。信長から城づくりを命ぜられた光秀は、

「唐崎に松があつたはず」と、思いつく。

坂本近くの唐崎神社には古代から有名な松があり、紀貫之らに詠まれてきたが、光秀の時代にはすでに枯れていた。

古典をこよなく愛する光秀は激戦地の北近江から枝ぶりのいい松を掘り、唐崎に運んだ。三日三晩かけて



松を移し終わり、喜ぶ光秀を司馬さんは描写している。

「光秀はまるで小児に化したように馬をくるくるとまわして松の姿を樂しみ、（中略）やがて、即興の歌を詠んだ。『我ならで 誰かは植ゑむ…… 滋賀の浦風』」

この酔狂なエピソードは、江戸時代の軍談書『常山紀談』に書かれて

いる話で、真偽のほどはわからない。唐崎神社でもらった簡単な由緒書きにも、光秀のことは全く書かれていない。

誰が植えたか、自然に生えたか、松はその後も文人に愛された。「唐崎の 松は花より臙にて」

と詠んだのは芭蕉で、光秀とは縁がある。大津市坂本から比叡山方向

に坂道の上がると西教寺があるが、ここに芭蕉の句碑がある。

「月さびよ 明智が妻の咄せむ」
牢人時代の光秀には客をもてなす金がなく、妻の瀬子が黒髪を売って費用にあてたという伝説があり、それを芭蕉は旅先で聞いたという。芭蕉も司馬さんのように、光秀に同情的だったのかもしれない。

風流でインテリで女房思いで敬虔な男

2006.2.10



坂本城があつたあたり
に建てられた光秀の像

なぜ光秀が信長に反逆したかは無数に説があり、怨恨説、野望説、朝廷関与説、秀吉黒幕説、あるいは光秀非関与説ときりががない。前阪さんは、

「光秀は本当は敬虔な男ですが、やむなく比叡山の焼き打ちにも加わっています。しかし、いつかは本当の気持ちを表さなくてはいけないと思っていたでしょう。私はそれが爆発したのが本能寺だと思えますね」といつていた。



坂の旧道を入れて
すぐにあったモテル

風流でインテリで女房思いで敬虔な男。やや堅苦しいが、ともかく善人には違いないだろう。

しかし、長年、光秀の文書を研究している京都府大山崎町の大山崎町歴史資料館の福島克彦学芸員は違った見方をしている。

「実際は計算をしつくす老獪な武将というのが光秀の実像に近いかもしれません」といふ。

本能寺の変のちょうど1年前、光



松崎にある湖西
唐にも描かれた
た浮世絵の景だ
として栄えた場
と重なる景勝地
は、船着き場の景

秀は家中に、18カ条に及ぶ「明智光秀家中軍法」を発令している。軍団が大きくなるにつれ、法整備が重要となっていくが、織田家できちんとした軍法を定めたのは光秀だけ。

各地で行われた検地も、権利関係に詳しい光秀の力が大きかった。柴田勝家、秀吉らが遠征を重ねるなか、京都を押さえたいのも光秀。

「信長がカリスマ的な存在になっていくなか、光秀は織田軍団の実務を一手に引き受けていた。信長は光秀を上手に使いましたが、実は信長をおびえさせるほど、光秀の力は大きくなっていったと思います」

「明智光秀家中軍法」の末尾にモノローグ的な文章があり、自分を「瓦礫」と呼んでもいる。

「瓦礫のような自分を引き立ててくれたのは信長だと書いています。あまりにへりくだりすぎていて、かえ

って信長との微妙な距離感を感じますね」

比叡山焼き打ちの直前に、雄琴の土豪にあてた手紙に至っては、

「仰木の事は是非ともなでぎりに仕るべく候」

というくだりがある。比叡山山麓の仰木などの村をなでぎり(皆殺し)にするぞと、気負い立っている。「国盗り物語」の優しき光秀はどこにもいない。

「土豪を懐柔し、比叡山を孤立させる芸当などは見事なものです。権力欲にあふれ、ワルのおいも持っている。しかも文化的な要素もある。多様な人だったと思います」

福島さんの強烈な光秀のイメージを反芻しつつ、丹波に向かった。

近江の次に光秀が命じられたのは丹波の攻略。京都府福知山市にある福知山城はその本拠地となった。

1986年に天守閣が再建されたが、石垣はつい最近まで戦国時代のままに残されていた。およそ400年以上の月日を隔てて補修工事が行われ、2年前に終了している。補修工事を請け負ったのは、穴太衆積みの栗田建設(大津市)。多くの石垣補修にあたってきた栗田純司会長(65)にしても、福知山城の石垣は気味が悪かったそうだ。

(四) 明智軍記について

「明智軍記」は明智光秀の一代の事蹟を記した軍記物語で全十巻から成り立っている。成立時期は最古の版本が元禄六年（一六九三）のものである。江戸時代中期、元禄のはじめ頃に成立したと言われる。伝本としては元禄六年・十五年・文政六年（一八二三）の版本と天明三年（一七八三）文化元年（一八〇四）写本がある。諸本として国文学研究資料館を初め十七カ所図書館にある。

各巻の内容のうち巻四に比叡山の焼き討ちに、巻五は光秀が先陣として出陣した。西近江を与えられた坂本城を居城とし、日向守となったことが記されている。

巻四 叡山破滅事付 討ニ捕ル和邇越後ノ守ヲ事

巻五 將軍被ル擬誅セント信長ヲ事付 堅田ノ城攻落事

「光秀公・妻熙子木像」 造立の経過

副会長 前 阪 良 憲

明智光秀公顕彰会の創立十周年を迎えるに当って、光秀公と妻熙子の木像を造

つてはどうかという意見を平成八年の役員会に口から出まかしを言ったのが役員会で取り上げられてしまった。今思うと迂闊なことを言ってしまったものだと言

言ってしまったものだと言省をしてるのだが、会員や光秀ファンの方々の御協力によって木像造立懇志金がお聞きし喜んでいてる次第である。

すでにゆかりの社寺旧跡には安置されているが、光秀と熙子夫妻の木像と一緒に安置されていることは聞いていない。これが出来ると初めてであるので、全国の光秀ファンの方々には脚光

をあげることを期待する一人でもある。

そこで、どの彫刻家の先生にお願いしたらよいか思慮したが、幸いして木村至宏先生（大津市歴史博物館長、成安造形大学教授）が推薦していただいた成安造

形大学教授の富樫実先生にお願いすることにし、先生も心良くお引受けいただいた。

光秀の画像は世に知られているが、熙子の画像は今だかつて見たこともないし、文献も資料も



木像製作中の富樫先生（右は筆者）

ないところからどのような画くかがむずかしい話である。

失礼とは思いつつ富樫先生には時代感覚からお願いするしかないの、とにかくお願いすることにした。

熙子を知るには三浦綾子著「細川ガラシャ夫人」中島道子著の「明智光秀の妻熙子」と「濃姫と熙子」の歴史文学に熙子の生涯と夫

光秀に対する献身的な姿が描かれていることにすぎない。熙子は絶世の美人であったことは間違いないであろう。

熙子は岐阜県土岐市妻木氏の出身で、十八才で光秀に嫁ぐのであるが、その年に病魔（疱瘡）に見まわれた。しかし光秀の心のやさしさと熙子の献身的な姿から考えると、富樫先生がど

のように熙子の像を製作され、どのような姿で熙子が現われるか、今から楽しみである。

光秀は琵琶湖に水城として坂本城を築城し、熙子は三人の娘たちを嫁がせ一番豊かな時代を送った坂本、

そして不断念仏の鉦の音がたえない西教寺を信仰し、光秀一家が訪れ、光秀一族のお墓のあるこの寺に光秀と熙子の木像が奉安されることは、遅すぎた感もしいではない。

光秀顕彰会十周年記念にふさわしい記念事業が出来たことは、私一人でなく全国ファンが喜んでいただけるものと思うのである。

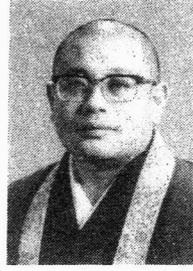
最後になったが製作をお願い受けた富樫先生は、京都府文化賞・功労賞・京都美術文化賞等を受賞され、大学では公共スペースでの造形活動、野外彫刻で新たな都市環境の創造を研究。その先駆者として御活躍されている。また山田奨氏（成安造形大学）にも労を取り持っていた。御紹介をもって感謝申し上げます。次第である。

（社会福祉法人真盛園園長
西教寺執事）

甦る光秀と熙子

顕彰会副会長 前 阪良憲

(総本山西教寺執事
大津市議会議員)



たであらう。

総本山西教寺の本堂前の西側に光秀一族のお墓と光秀の妻熙子のお墓が静かに眠っている。この地にお墓があるうとは一部の人以上は、しらなかつ

光秀夫人熙子の里、

土岐市を訪ねて

顕彰会副会長 中島道子

(作家)



平成六年は芭蕉の年であった。(没後三百年) その芭蕉が熙子の婦徳を賛えた

「月さびよ……」の句碑。それが前阪良憲師の努力によって、西教寺光秀墓所内、熙子の墓前に建立され大津の新名所の一つとなった。これが機はなつて、熙

の地に光秀を甦らす顕彰が光秀愛好者によって活発に展開している。一つの例をあげると大津市坂本は勿論のこと、坂本城址のある大津市下阪本では琵琶湖畔なぎさ公園に光秀石像が、大津市ふるさと創生事業と、下阪本町づくり委員会の協賛で除幕される予定である。何んと言っても最大の顕彰は長岡京市の勝竜寺城公園の整備である。これは当時の市長であった五十棲辰男氏の政治力によるものであり、そして毎年十一月中旬子の出身地土岐市でも顕彰の機運が起こり、昨年の五月、私は初めて土岐市に出かけた。

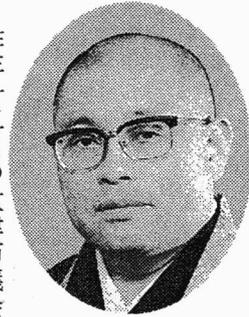
土岐市文化プラザには八百数十人がこられ、熙子美談を聞いてもらった。来賓の中には前阪師のほか、可児市長山城址保存会長の林則夫氏、福井からは奉賛会設立に尽力された加藤一宏氏が来臨された。また、福井放送の田辺信氏が、福井・細川ガラシヤ祭で市の活性化を図かって多くの観光客を寄せている。私は作家の中島道子先生の著書「明智光秀の妻熙子」・「濃姫と熙子」を読んで、熙子の女性として生きる姿、夫光秀に仕える女の気持、戦国時代に生きる武士の光秀と光秀に寄せる女の愛の葛藤が熙子の髪を切つて夫に捧げ、光秀のメンツを立てる生きざまは戦国ならではであろう。私に中島道子先生は今度現代女性の黒髪コンテストをやつてはいかががと声を掛けられている。熙子を賛える黒髪エピソードをこのように知ってもらうには良いイベントだと思う。私の構想もまとまりつつあり、一部の人に話をするとはよいことだと、賛同していただく人も出来てきた。平成八年秋の紅葉シーズンに、真赤に紅葉したもみじを背景に美しい女性の黒髪と真青に苔むした緑に立つ一女性のコンテストをやつて明智光秀の妻熙子を甦らせてはどうか夢を見ているのである。

大津(共に顕彰会設立に関する内容)・福井県丸岡町(句碑)等、光秀公関係のイベントを約八年にわたり収録したビデオを公開した。その後私たちは熙子の父、妻木城主妻木藤右衛門広忠の菩提寺宗禅寺を訪ね、大霊位を目前にした。これがはずみとなって、土岐市泉郷土史同好会が土岐源氏庶流の妻木氏、並びに明氏の研究誌の発刊を急ぐこととなった。また可児市天龍寺をも訪ね、保存会の方々の営々とした奉祀奉賛活動も目のあたりにしてきた。

こうして光秀公顕彰は、新たに熙子夫人出身の土岐市を加えて、益々その輪を広げていくこととなった。今後とも、西教寺を核として関係各地の研究、奉賛が前進することを心から期待するものであります。

坂本城を琵琶湖畔に復元

副会長 前 阪 良 憲



昨年十二月の大津市議会
本会議において、私は「明
智光秀が築いた坂本城の復
元について」質問提案をし
ました。つきはその大要。

◇

元龜二年（一五七一年）
九月の比叡山焼き打ちの後、
織田信長は明智光秀に坂本
の地に城を築かせ、以後、
本能寺の変が起こるまでの
約十年間余り、坂本城は明
智光秀の本拠地でありまし
た。

フロイスの書簡に、「明智
光秀は比叡の山の近く、琵琶
湖のほとりにある坂本と
呼ばれる地に邸宅と城塞を
築いた。明智の城ほど有名
なもの天下にないほどだっ
た」と書かれており、また
「光秀は築城のことに造詣
が深く、すぐれた建築手腕
の持ち主」と書いています。

坂本城が琵琶湖に面し、
城内に湖水も引き入れてい
たことなども考え合わせる
と、水城形式でありました。
この形式は、大津城、膳所
城の築城に受け継がれたと
言われています。坂本城内
では、光秀の茶の師匠、津
田宗及や京都の吉田神社神
官、吉田兼見などと、たび
たび茶会を催したことも
有名です。

城跡の下阪本地区には、
明智光秀像が建立されてお
り、坂本地区でも「明智光
秀公顕彰会」が十年前に発
足、全国的に活発な活動を
展開しています。

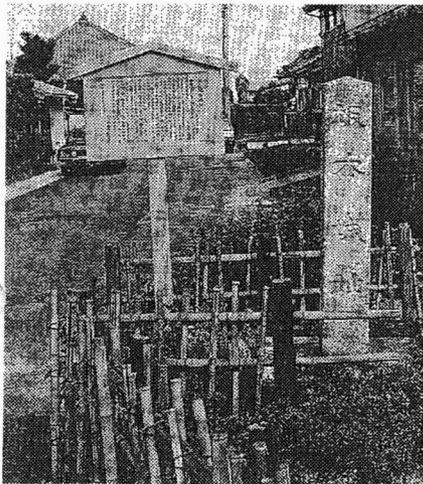
天正十年（一五八二年）
六月十四日。本能寺の変か
ら数えて十二日、坂本城は
落城しました。この時の状
景を中島道子氏は、歴史小
説「湖影」の中で「明智光
秀の妻ひろ
子は、坂本
落城のとき
天守の櫓か
ら見下す眼
下には、城
を取巻く軍
勢が満ち満
ちていた。
しかし、ひ

ろ子の目にはそれをよそに、
鏡のような静かな琵琶湖が
映った。この美しい坂本、
光秀が初めて築城した坂本、
この坂本で死ぬのは本望だ
と。やがて城の各所に火
が放たれ、坂本城は炎の城
と化していった」と、書か
れています。

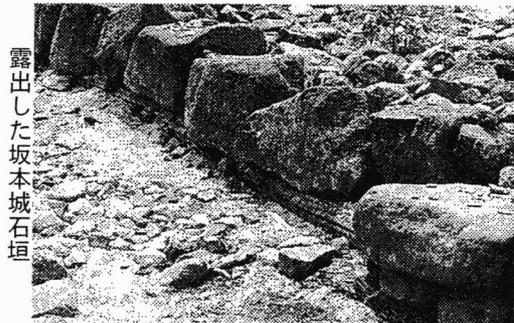
◇

私は坂本城復元の場所は、
下阪本木の岡地先の湖に面
した一画に、最適の土地が
あります。そこは、六年前
の平成四年五月、日本で初
めてビルをダイナマイトで
爆破解体し、全国的に有名

（社会福祉法人真盛園園長
西教寺執事
前大津市議会議員）



「坂本城址」碑



露出した坂本城石垣